

古代国家の形成プロセス

—前提としての認識の整理—

酒 井 龍 一*

Formation process of the ancient state

Ryuichi SAKAI

はじめに

近年における新たな諸理論の導入により、国家の形成プロセスに関する論議の展開をみつつある。本稿は、国家の起源ならびに考古学の方法論にかかわる諸研究に学ぶことにより、わが国での古代国家の形成プロセスの理解のための糧としたい。稿の大部分は、有効と考えられる認識の整理にあてるが、後半には、わが国での古代国家の形成プロセスについての私見を簡略にのべておきたい。

原初国家と二次国家

国家の起源あるいはその形成プロセスの論議には、原初国家 (pristine state) と二次国家 (secondary state) の区別がまず必要であろう。

「原初国家」とは、一定の内的・外的条件のもとで独立的に生成したものであるに対し、「二次国家」とは、直接・間接をとわず、すべてすでに存在していた近隣の国家からの影響で成立したもの (M. Fried 1960, 1967, 中林 1969: 107) とされる。

一般的には、わが国での古代国家の形成過程は、弥生時代 (紀元前3世紀頃以降) ~ 律令体制確立時 (紀元後7世紀頃) のあいだに想定される。隣接する中国大陆には、それをはるかさかのぼる、例えば、原初国家の展開型態ともみるべき殷をはじめ、その後いくつかの国家がすでに出現している。大陸文化や社会動向のわが国にあたえた諸影響は、考古学や古代史学の指摘するところである。ゆえに、わが国の古代国家は、「二次国家」として成立した可能性がきわめて強く、その再構成には外的要因を考慮したモデルが要求されることになる。

考古学的アプローチ

国家の起源ならびにその形成プロセスの探究は、文化人類学、民族誌学、歴史学、古代学、先史学、考古学などの諸分野でつみかさねられてきた。このうち、「原初国家」の究明には考古学が有効である。B. Price は次のようにのべる。

It is paradoxical that there have been numerous studies of individual secondary states, including many which emphasize process and dynamics: all contemporary, all

* (昭和57年9月30日受理)

ethnographic-present, and the bulk of ethnohistorically documented states are secondary. Moreover, all direct, non-analogical, non-retroductive knowledge of pristine state is in fact derived only from archaeology. (B. Price 1978: 161)

もちろん、遠き過去に生じた二次国家の究明についても、考古学は同様に有効である。しかし、規則的で法則的現象としての二次国家に関する系統だった理論的取扱いほとんどない (B. Price 1978: 161) とされる。

日本考古学の特質

わが国の考古学の主流は、*cultural=historical approach* であった。これは、えた各種データを時間的・空間的に総合して文化や社会を帰納的に復元する。しかし、問題点と有効性を当然もつ。例えば、データの解釈は研究者個人の認識にもとづくため、ばらつきが大きい。そのため、真にそぐわない不合理な解釈が客観的かつ明確に否定されにくい。言い換えれば、仮説は多くうみだされるが、妥当な定説を確定することが困難である。わが国における古代国家の形成プロセスについても諸説があり、いずれもまた不明瞭である。

一方、この立場に不可欠な遺物の型式分類と編年は確立されてきた。いまや当該時代に対し、数十年の単位で土器編年が設定されており、その精度は世界に類をみないだろう。それゆえ、発掘でえられる膨大なデータは、すべて細やかな年代が与えられ、国家の形成プロセスを理解すべく役立てられる。社会や文化の時間変化が微妙に観察でき、事物の時間的変化の追求を得意とする考古学の特質に合致する。

この他、五千人とも言われる研究者の多さは、別個の認識・理解・調査方法・評価・仮説を産みだし、年間一万件とも言われる発掘調査の多さは、幾度となくそれらを検証できる可能性をつくる。

以上の諸状況は、正当に競合可能な理論と検証可能な仮説を創出することによってのみ、精度の高い結論を引きだすのに有効に作用する。

cultural=processual approach

Lewis R. Binford は、*cultural=historical approach* による伝統的な考古学を否定し、*cultural=processual approach* による科学的な新しい考古学を提唱した (L. R. Binford 1962, 1968)。これは、前者の帰納法による問題点を解消すべく、仮説の構成とその検証という作業を実験として位置づけることにより、演繹法による検証された結論をえることができる。

we must continually work back and forth between the contexts of explaining the archaeological record and explaining the past; between the contexts of proposition formulation (induction) and proposition testing (deduction). (L. R. Binford 1968: 118)

具体的には、*hypothesis formation — logical out-come — bridging argument — if ... then argument* という作業段階を経ることにより、最終的に仮説が検証される (D. H. Thomas 1979: 100)

こうした立場から、国家起源の研究戦略においても次のようにのべられる。

The construction of research strategies for the investigation of state origins is complicated by two factors: the type of explanations required and samples available to test them. (H. T. Wright 1977: 115)

国家形成過程の社会型態——民族誌学による

さて、ここでは現存諸社会の観察から導きだされた国家形成過程の社会型態とはどのようなものかを、増田義郎（増田 1969）の作業から概観しておこう。

増田は、平等社会 *societas* と階級社会 *civitas* のあいだに、Southall の分節国家、Service 首長制社会、Fried の地位社会を位置づけた。（：89）あわせて、わが国の古代国家の形成過程にも触れ、「邪馬台国などには、首長制社会＝地位社会＝分節国家的な性格が、きわめて顕著に認められるようである」（：92）と評価した。これらの社会は、再分配機構の中心にたつ首長の存在を特徴づけることにより、互惠による平等社会とは区別されるだけでなく、国家のような政府機関や政治的階級の確立をみないことから、階級社会ともまた区別されるという。（：88, 92）

この段階を特徴づける首長や再分配についての考古学的検証は、次の諸点により可能と思われる。

1. 再分配は、各地の生産物が個別に各地に移動するのではなく、首長のもとに求心的に移動する。
 2. その結果、首長のもとには各種生産物を保管すべく、平民のものとはことなる貯蔵施設が設けられるであろう。
 3. 生産物の再分配とは反対に、間接的に、なんらかの生産物・労働・サービス等が首長のもとに求心的にあつまり、それが住居・墓その他に変換しているだろう。
- 以上の諸点を考慮することにより、その段階の社会型態を考古学的に検証できよう。

増田の作業は、国家の形成過程における社会型態の明示には成功したが、平等社会—（その中間社会）—階級社会への展開が、“なぜ”、“どのように” おこったかについては、論の趣旨と民族誌学の方法論的限界に起因して論議しなかった。

国家起源にかかわる諸理論

Henry T. Wright による従来の国家起源にかかわる諸理論の整理と、一般システム理論の援用による彼の国家の定義をとりあげる。（H. T. Wright 1977）。

彼は、諸理論を次の4つに大別した。

1. Managerial theories (K. Wittfogel を代表)
2. Internal conflict theories (M. Diakonov を代表)
3. External conflict theories (R. L. Carneiro を代表)
4. Synthetic theories (R. M. Adams を代表)

そして、これらの諸理論を総合することにより、次の諸点を引きだした。

1. State are variously defined as either a kind of government (that is, specialized and hierarchical) or a kind of society with such a government
 2. All examples of theories involve the interaction of a number of variables, even if one is specified as a prime mover.
 3. All examples involve implicit or explicit positive feedback processes leading to growth, but none involves stabilizing negative feedback processes
 4. The connections between certain elements are neither specified nor obvious
- (H. T. Wright 1972: 218)

さらに、一般システム理論による理解をすべく、国家を次のように考えた。

For my purposes a state can be recognized as a society a specialized decision-making organizations that are receiving messages from many different sources, recording these messages, supplementing them with previously stored data, making the actual decision, storing both the message and the decision, and conveying decision back to other organizations. (H. T. Wright 1977: 220-221)

システムとしての社会

一般システム理論によりながら社会や国家を理解しようとする H. T. Wright らの立場を認めて、いますこし続けてとりあげよう。

現実世界にて観察される諸関係の基礎となるルールを探究すべきこの理論は、最初 Von Bertalanffy (V. Bertalanffy 1956) により展開された (S. Champion 1980: 52)。

James G. Miller によれば、システムとは次のように規定される。

A system is a set of units with relationships among them (Bertalanffy 1956). The word "set" implies that the units have common properties. The state, of each unite is constrained by, conditioned by, or dependent on the state of other units. The units are coupled. Moreover, there is at least one measure of the sum of its units which is larger than the sum of that measure of its units. (J. G. Miller 1965: 200-201)

そして、人間の社会は一般的に "living system" と考えられ (J. Hill 1977: 61), それは次の4つの原則により特色づけられるという。

1. Each living systems is organized for self-presentation.
2. Each living systems is hierarchically arranged.
3. Living systems return to a particular state after disturbance.
4. Each living system tends to develop toward a maximum organization. (V. Bertalanffy 1968, R. I. Ford 1977: 155-156)

変化についての explanation

国家の形成プロセスの理解は、考古学的には、社会型態の時間的・段階的变化として観察することによりなされよう。考古学は変化を説明することが主たる責任 (F. T. Plog 1974: 8) である。ここでは、変化についての説明にとって必要な4条件をあげておきたい。

1. A functional (mathematical) description of the system and its homeostatic processes prior to change.
2. Isolation of the extrasystemic inputs promoting change, and demonstration of the failure of homeostatic mechanisms to cope with the inputs — and that change is thus a "least-cost" alternative.
3. Demonstration that "new" variables and homeostatic mechanisms have been selected for, which stabilize the system at a different level.
4. Determination of the fact that the change is essentially irreversible. (J. N. Hill 1977: 91)

変化は、システムの homeostatic mechanisms が適切に機能することを失敗した時に生じる (J. N. Hill 1977: 64) と考えられる。変化の理解には、deviation-counteracting processes と deviation-amplifying processes の紹介が必要となろう。M. Maruyama によれば、

the deviation-counteracting system has mutual negative feedbacks between the elements in it while the deviation-amplifying system has mutual positive feedbacks between the elements in it. (M. Maruyama 1963: 164)

彼の変化についての考え方で重要なのは、その誘因となる initial kick の役割である。変化は initial kick と deviation-amplifying processes が作用して生じるとされるが、ついでには以下のような例をあげて示される。

Take, for example, weathering of rock. A small crack in a rock collects some water. The water freezes and makes the crack larger. A larger crack collects more water, which makes the crack still larger. (M. Maruyama 1963: 166)

彼の initial kick と deviation-amplifying processes は、例えば、農耕の起源についての Kent V. Flannery (K. V. Flannery 1968) や、initial kick については批判されつつも James N. Hill による変化についての説明 (J. N. Hill 1977) などに大きな役割をはたしてきた。

わが国における古代国家の形成プロセス

わが国における古代国家が、いわゆる畿内の地を核に、弥生時代～奈良時代のあいだに成立したことを前提に、その形成プロセスを概説する。(酒井1977, 1978:58-59)

[第一期] 縄文時代晩期～弥生時代前期

いわゆる畿内の地にも、採集経済に基盤をおく縄文社会に重複して、水稻農耕を中心とした生産活動に基盤をおく文化をもった人びとの渡来をみた。両者は個々の文化を保持したまま集落を別にして住み分けている。縄文系の人々は、例えば、石棒・土偶に象徴される伝統的な祈願型の祭祀型態を継続し、また葬制なども継続する。

この時点の、社会システムの単位は個々の集落が基本であろう。

弥生時代前期末頃には、両者の個性が解消する。

[第二期] 弥生時代中期初頭～中期末

前期における各小地域の開拓を前程として、その地を核にさらに周辺環境の開拓をすすめることにより各集団固有のエコシステム(生態系)を形成する。それぞれは、核となる拠点集落と、その周辺の小集落により小地域社会が構成されている。そして、各集団固有のエコシステムを基盤に、各種生産物の生産消費の相互活動を絆として、広範地域に経済・文化・イデオロギーの複合体としての一つの大社会が構成される。

大社会の構成下位単位は拠点集落である。各拠点集落は、その規模・構造・機能について隔差はなく、特定の集落・集団・個人を頂点とする社会のヒエラルキーは認められない。各地の生産物は大量・頻繁・平均的に各拠点集落間を移動し、特定の地にむけて求心的に移動する現象は、全く認められない。いずれの拠点集落も、生産=消費体として、大社会の骨組みとして機能している。

大社会自身は、対外的な調整機能として、銅鐸を特定祭器とした祈願型の祭祀をもつ。ちなみに私見によれば、銅鐸の埋置行為は、大社会や集落の外から浸しうる悪霊や外敵を防ぎとめる結果行為としてなされる。(酒井 1978, 1980)

[第三期] 弥生時代中期末～後期

大陸における政治的変動に起因する大陸一半島一北九州一畿内方向への社会圧が発生して、畿内大社会全体の防衛気運が高まる。これに対応して、大社会の対外的な調整機能としての銅鐸祭祀の強化が急激に生じる。具体的には、①銅鐸そのものの大型化、②銅鐸数

の増加，③埋置行為の頻繁化などが実施される。しかし，更に強い外圧に対応して強化されるが，①大型化についての技術的限界，②輸入材料の数量的限界，③特定青銅器を媒介とする祈願型祭祀のもつ非現実性 という諸限度を越えた時点をもって，銅鐸を用いた祭祀は中止される。

銅鐸祭祀にとって代わる新しい対外調整機構として，人間集団による機能集団が出現する。機能集団は，対外調整機構としてより具体的に機能しうる。ここで，従来の生活集団（生産＝消費活動）は，生産集団（生産活動）と機能集団（消費活動）に分解するだけでなく，一般生活集団は機能集団を経済的にささえる役割に位置づけられるようになる。

この時点で，弥生時代中期を特徴づけた「大社会」は解体する。

〔第四期〕 弥生時代末期～古墳時代初頭

緊張関係の一応の終結により，軍事機能をもった集団の存続意義は解消されるが，集団自体のもつ慣性と二重構造により，そのまま存続する。一度解体された大社会は，二度とは旧状にもどらない。ここに大規模な土木工事その他の実施可能な条件が生みだされ，やがては前方後円墳を造営する中核的役割をはたすようになる。

生産集団から産出される各種生産物は，機能集団の方向へむかうが，それらの消費システムの出現をみていないため，余分なエネルギーの放出の一型態として大規模古墳の造営がたとえば実施される。

なおこの時点では，北九州や瀬戸内海北岸地域にかつて構成されていた旧大社会（既に解体）とゆるやかな結びつきがなされる。

〔第五期〕 古墳時代前期～中期

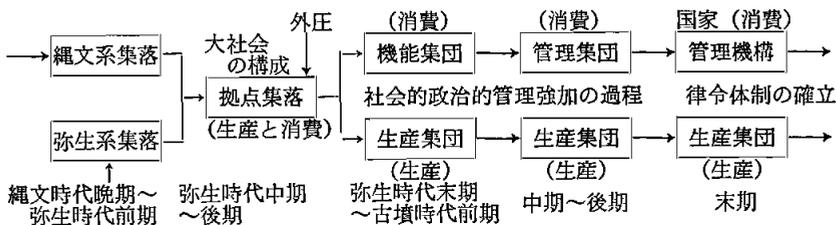
各地における多数かつ継続的な大型の前方後円墳の造営活動をつうじて，生産集団からの労働力と生産物の大量かつ組織的供出形態が，増幅的に確立されていく。

この時点でもなおまだ畿内において余分なエネルギーの消費システムの構築はない。原則として，各地のエネルギーは各地で放出するにとどまっている。重ねていえば，全国各地から畿内中央部にむけての求心的な生産物やエネルギーの集中は大きくない。

〔第六期〕 古墳時代後期～律令体制確立

中期における労働量の急激な拡大とあいまって，各種機能集団の規模と数とも拡大され，同時に各種生産物と労働力の消費量も急激に増加する。また群集墳の造営としてより低レベルでの余分なエネルギーの放出もおこなわれる。そして，生産集団の生産量とのバランスが破れた時点をもって，直接に生産に結びつかない消費労働は中止される。ここに，生産集団はすでに拡大化した各種機能集団をささえる機能が確立するとともに，大規模消費労働の中止による余分なエネルギーの管理機構が創出される。すなわち，生産集団からのエネルギーの収奪形態と，収奪エネルギーの管理機構の両者が，律令制度として確立し古代国家の出現をむかえる。

その経過は，次のようなモデルで表わせる。



第1図 古代国家の形成プロセス

おわりに

以上、これ迄古代国家の形成プロセスを理解するうえで有効な諸認識と、それらとは別にわが国における古代国家の形成プロセスについて、従来えていた私見の概略を示した。次の課題としては、それら諸認識を私見にいかに関活用するかということになるが、それについては稿を改めたい。

参考・引用文献

- Binford, Lewis R., 1962 *Archaeology as anthropology*. *American Antiquity* 28.
 1968 *Archeological perspectives. New perspective in archeology*. S. R. Binford and L. R. Binford, eds. (1968) 1972 *An Archeological Perspective*.
 Champion, Sara, 1980 *Dictionary of terms and techniques in Archeology*.
 Flannery, Kent V., 1968 *Archeological systems theory and early Mesoamerica*. *Anthropological archeology in the Americas*. B. J. Meggers, ed.
 Ford, Richard I., 1977 *Evolutionary Ecology and the Evolution of Human Ecosystems: A Case Study from the Midwestern U. S. A.* *Explanation of Prehistoric Change*, J. N. Hill, ed.
 Hill, James N., 1977 *Systems Theory and the Explanation of Change*. *Explanation of Prehistoric Change*. J. N. Hill, ed.
 増田義郎 1969, 政治社会の諸型能, 思想, No. 535.
 Maruyama, Magoroh, 1963 *The Second Cybernetics: Deviation Amplifying Mutual Causal Processes*. *American Scientist* 51.
 Miller, James G., 1965 *Living Systems: Basic Concept*. *Behavioral Science*.
 中林伸浩 1969, 東南アジア首長制の構造, 思想 No. 535.
 Plog, Fred T., 1974 *The Study of Prehistoric Change*.
 Price, Barbara J., 1978 *Secondary State Formation: An Explanatory Model*. *Origins of The State*, R. Cohen and E. R. Service, eds.
 酒井龍一 1977, 古墳造営労働力の出現と煮沸用甕, 考古学研究94号.
 1978, 弥生中期社会の形成, 歴史公論第4巻3号.
 1978, 銅鐸その内なる世界, 摂河泉文化資料10号.
 1980, 銅鐸論, 摂河泉文化資料21号.
 Thomas David H., 1979 *Archaeology*.
 Wright, Henry T., 1977 *Toward an Explanation of the Origin of the State*. *Explanation of Prehistoric Change*, J. N. Hill, ed.

Summary

We have new theories and useful methods, such as general systems theory, cultural = processual approach, and etc., to recognize the formation process of ancient state in Japan.

The first half of this article is a note, citing some expressions and suggestions by famous researchers L. R. Binford, J. N. Hill, B. J. Price, H. T. Wright and etc..

The later shows archaeological observations of the formation process of ancient state in Japan.